

## おいしそう

並木 せつ子

私は食いしん坊なので、小説や随筆を読んでも食べ物が出てくると、そこで一目目がとまる。岡部伊都子の『美を求める心』を読んでも、「まっしろに粉をふいたみずみずしい葱の青をやわらかに煮て食べるおいしさ」という文章のところで、頭の中は“やわらかに煮た葱”でいっぱいになるし、武田百合子の『富士日記』では、読了後の「おもしろかった」という充実感を思い出すたびに、武田夫妻の献立にあった“ふかしパンと夏みかんゼリー”が浮かんでくるという具合なのだ。ある日本のミステリで“あげたてのメンチカツ”をおいしそうに食べる場面があった。読んでいるうちに、苦手なメンチカツが妙に食べなくなったこともある。このミステリ、書名も著者名も覚えていないが、メンチカツだけを覚えているのである。

絵本の読み聞かせやストーリーテリングでも、話の筋から食べ物に意識がそれてしまうことがあった。『だんごどっこいしょ』のだんご、『ねずみのすもう』の餅、『ジャムつきパンとフランス』のジャムパン、『くまのプーさん』のはちみつとコンデンスミルクなど。もともと、これらの食べ物が大好きだったわけではないのに、文章で読むと無性に食べなくなるのが不思議だ。

それにもまして「おいしそう」に感じられたのが、外国の子ども本に出てくる見たことのない食べ物だった。スグリやコケモムのジャム、レモネード、マフィン、プラマンジェ、焼きりんご、ジンジャーブレッド。プディングには焼肉のプディングやパンプディングなんていうものもあって、家で作る粉を煮溶かして固めたプリン（私が子どもの頃あったイ

ンスタントのプリンの素）とはどうも違うらしいことにも気がついた。料理ではないがニクズクやカミツレという響きもかっこよかった。こうした食べ物、今では珍しくなくなったが、最初に読んだときには、とにかくハイカラで、とてつもなく「おいしそう」な食べ物に思えたのである。

ローラ・インガルス・ワイルダーの本にある、ひきわりトウモロコシのパンや塩でふくらませたパン、雪の上で糖みつを冷やして作ったキャンディ。本当は羨ましがれるようなものではなかったのだろうが、これもとても「おいしそう」に思えた。姉妹がたった一つのキャンディやクッキーを、ちょっぴりずつ大事に食べる様が、読む者の「おいしそう」という気持ちを助長するのかもしれない。

あまたある「おいしそう」本の中で一番は、子どもの頃読んだ『ちびくろさんぼ』だろう。とらがバターになった後の話の展開がとりわけ好きだった。ただ、私の記憶のかたすみに残っているのは、ホットケーキではなくドーナツなのだ。

古い『ちびくろさんぼ』を調べてみると、最初の「岩波の子ども本」（1953年刊）はホットケーキだが、50年代に出版された『ちびくろさんぼ』の約半数は、「おかし」「とらやき」「ほかほかけいき」などで、ホットケーキではなかった。60年代には、ほとんどがホットケーキになるものの、「バターであげる」と表現している本も多く、絵がドーナツになっているのもあった。

国会図書館の蔵書目録にある『ちびくろさんぼ（トッパンの人形絵本22）』（1957年刊）の要約は「・・・トラがドーナツになる楽しい絵本」だし、1956年に製作された人形アニメ映画『ちびくろさんぼのとらたいじ』のあらすじも「ドーナツを作った」となっている。あながち私の記憶違いではなかったようだ。英語版はどちらでもないpancakesだった。（なみき せつこ）

## 子どもの本の古本屋 デフォーを訪ねて

近年、子どもの本の古書店が、少しずつ増えてきているようです。多くは、絶版本や海外の絵本などを扱った、絵本マニアに向けたお店ですが、一般の子どもや親御さんに向けたお店が富山に誕生していると聞き、関心を持ちました。図書館も書店も充実した富山の街で、どんな活動をされているのでしょうか？ 子どもの本を巡る環境が少しずつ変わりつつあるのかも知れないという思いを胸に、富山に向かいました。

### お店の棚案内

お店に入ると、店主の田中史子さんが、ふんわりと優しい笑顔で出迎えてくれました。田中さんは店内にいらした2組のお客さんにも優しくお声をかけ、本についておしゃべりが弾んでいます。

お客さんたちが買い物を済ませて帰られると、「まずは…」と、店内の棚の本の分類について、詳しい説明を聴かせてくださいました。

お店で扱う本は、赤ちゃんから高校生向けの本が中心で、絵本、低学年向けの読み物、知識の本、社会科学の本、高学年から大人向け読み物、伝記、詩、しかけ絵本、ふるさとの本コーナーときれいに分類されています。しかけ絵本と富山に関する本は、非売品だそうです。「古本屋さんで非売品コーナーとは珍しいですね」と尋ねると、「しかけ絵本は、来てくれた子どもたちに、楽しんで見てもらうためのものです。ふるさとの本は、入手が比較的困難な本ですから、非売本にしています」とのこと。実際に、来る子ども来る子どもに声をかけ、「面白い絵本があるわよ」と、しかけ絵本を取り出して一緒にページをめくり、歓声をあげる子どもたちを嬉しそうに見つめていた田中さん。一方の、地元出版社で作られたようなふるさとの本は、少部数なので、貴重なのだそうです。「地元に関してどんな本が出版されているか、見てもらいたいです」。

そう、本が分類してあって探しやすいこの雰囲気。何だか図書館のようだなあと思えるのも納得で、このデフォーは、富山市の県立図書館で長年司書をされていた田中さんが、退職後に始められたお店なのです。

### お店を始められたきっかけ

お店の開店は2015年2月。司書として勤められていた頃から、「いつか子どもの本の店を開きたい」と思いを温められていらしたそうです。そんな中、子どもの本の値段が上がってきて、「子育て中の若い親御さんが気軽に買える値段でなくなってきた」と、古本屋さんを始めことにしたのだそうです。

司書の時代は、児童書を担当されていたわけではなかったけれど、とにかく「子どもの本が好き」で、「子どもに本を届けたい」一心で、始められたのです。

本を買い取りするために古物商の資格を取られたという田中さんですが、お店の本の価格設定が実にシンプルで、しかも子どもがお小遣いで買える金額になっています（絵本が～500円、単行本（読み物等）は～400円、新書判文庫（青い鳥文庫など）は～300円、月刊絵本（「こどものとも」など）は100円、文庫本も100円）。

「デフォー」という店名は、田中さんが小さい頃から好きでよく読んだロビンソン・クルーソーの作家、ダニエル・デフォーに由来するそうです。「濁音のある、あえて甘くない名前にしました」とニヤリと笑われた田中さん。ふんわりした笑顔の中に、きらりと気概のようなのが見えました。

店内の本棚の上に、ダニエル・ペナックの「読者の権利10カ条」が額に入れられて掲示されていたのも、そんな田中さんならではのかもしれません。（ご存じない方のためにご紹介します。1. 読まない権利、2. 飛ばし読みする権利、3. 最後まで読まなくていい権利、4. 読み返す権利、5. 手当たり次第に何でも読む権利、6. ポヴァ

リズムの権利（小説に書いてあることに染まりやすい病気）、7. どこでも読んでもいい権利、8. あちこち拾い読みする権利、9. 声を出して読む権利、10. 黙っている権利）。



富山市の富山城址にほど近く、全面ガラス窓で開放感のあるお店。飾り棚には、いつもテーマに沿って本が並べられています。



書棚の周りには、手作りの人形や雑貨が飾られて楽しい雰囲気です。中央のイスとテーブルでは、本を広げたり、おもちゃで遊んだり出来ます。

## 広がるご縁

古本屋の2階は、「もるげん」というギャラリーとなっていて、ここも田中さんが運営をされています。富山県高岡市出身のドイツ児童文学翻訳家の松沢あさかさんの作品を展示するために、ギャラリーをOPENされたのだそうです。その初めての展示期間中に、富山市在住のアフリカ文学研究者の村田はるせさんがギャラリーを訪れ、「私はアフリカの絵本を持っています」と声をかけられたのがきっかけで、次の展覧会企画が実現したのだというから、面白いですね。現地で調査をされ、子どもの本をたくさん集められていた村田さんのコレクションを並べ、アフリカの絵本の歴史や現在の状況について詳しく伝える展示をされたそうです。

今も常設展として、ギャラリーの一角に、村田さんから買い取られたというアフリカの絵本が並んでいました。アフリカでは本が高価で、図書館も整備されておらず、誰でも本が読めるという状況にありませんでしたが、少しずつ自国の作家が自国の子どもたちのために、自国の物語や文化を伝える絵本を作れるような環境になってきていること、ここに並んでいるのはそうしたアフリカの作家が描いた絵本であることを、優しいお声で話してくださいました。

また、ギャラリーには、貴重な子どもの本が並ぶ棚があり、時には手芸などのワークショップの会場になったりすることもあるということでした。さらに何かご縁が広がりそうな、楽しいワクワクが充満している空間でした。

## ライバルはスマホ

開店以来、たくさん子どもや大人に親しまれ、顔なじみの子どもも増えてきているということですが、田中さんの目下の目標は、高学年の子どもたちに来てもらうことだそうです。高学年の子どもたちは塾通いなどで忙しく、学年が上がると顔を見せてくれなくなる子が多いとのことでした。そして「本のライバルはスマホなんです」ときっぱり。

お店の前の通りは、一方通行の幅で小さな道ですが、人通りも車通りもひっきりなしです。次々に訪れるお客さんに、始終笑顔でお声をかけていた田中さん。そんな田中さんとおしゃべりを楽しみに通うお客さんも多いことと思われました。

富山の街に「デフォー」というお店が明るく灯っていることで、すてきな可能性が広がるような、そんなお店でした。

「子どもたちに向けて作られた本を、子どもたちの手に届けたい」。田中さんのシンプルで一途な思いがかたちになった、「子どもの本の古本屋 デフォー」のこれからが、ますます楽しみです。（LAS探検隊）

「子どもの本の古本屋 デフォー」  
<https://www.facebook.com/defoe2014/>  
<http://defoef.wixsite.com/defoe>